

アイヌタイムズ 第27号 日本語版

★ オオバコ

オオバコは、日本のどこにでもあるので、各地で色々な呼び方があります：オンバコ、オバコ、ギャーロッパ、カエロッパ、ゲェーロッパ、マルバ、マルコバ、テリコバコ。アイヌ語では、「エルムキナ」と呼ばれています。

知里真志保の「分類アイヌ語辞典」には、以下のように書かれています；「「穂がねずみの尾に似ているからそう呼ばれる。」と古老が言った。」と書かれています。

(『知里真志保著作集 別巻I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編』 1976年 平凡社 p.33)

川上まつ子さんは、次のように言っています

：「これは煎じて飲むのと、それから、できたものにも貼り付けて使う。そうすれば、悪いつゆを吸い上げるだっていって。悪いつゆを吸い出しているうちに膿も出たり、膿の根っこが出ればもう後、治ってくるの。何回も貼り替えるんだ。火にあぶれば柔らかくなるの。採ってすぐ。ちょっと火にあぶって柔らかくなったら使える。

煎じて飲んでいいのは、腹、赤痢の時の薬に最高良かったの。うちの親父がその赤痢で三ヶ月、もう駄目だと思ったもの生き抜いてから八十なんぼまで生きていたんだもの、それを助けるために使って覚えているの。クマイチゴの根とオオバコの根と煎じて冷ましておいて、水欲しがる時、飲ましてやる。」

(『川上まつ子の伝承 - 植物編1 -』(財)アイヌ民族博物館 編 1999年 (財)アイヌ民族博物館 p.18~p.20)

中本ムツ子さんは、以下のように言っています：「背中に腫れ物ができたとき、母はオオバコをあぶって貼ってくれました。するとよく膿が出ました。」

(『アイヌの知恵・ウパシクマ』 1999年 片山言語文化研究所 p.20からの引用)

日本の他に、千島、サハリン、中国、台湾、東シベリア、マレーシアに分布し、草地に普通に見られます。学名である「*Plantago asiatica*」の *asiatica* は、「アジア」ということを意味します。*plantago* は、ラテン語の *planta* 「足の裏」に由来し、葉の開いた状態を表します。

漢方では、乾燥した全草は「車前草(シャゼンソウ)」、種子は「車前子(シャゼンシ)」といます。全草の煎汁を、利尿、咳止め、下痢止めに用います。

[横山 裕之] 沙流・千歳